

[成果情報名] ジャガイモそうか病に対する各種薬剤の種いも浸漬処理による伝染防止効果

[要約] ジャガイモそうか病の種いも浸漬処理薬剤は、バクテサイド水和剤の伝染防止効果が最も高く、次いでアグリマイシン-100、銅ストマイ水和剤、フロンサイド水和剤の効果が高い。

[キーワード] バレイショ、ジャガイモそうか病、種いも浸漬処理、伝染防止効果

[担当] 長崎県農林技術開発センター・農産園芸研究部門・馬鈴薯研究室

[連絡先] (直通) 0957-36-0043

[区分] いも類

[分類] 指導

[作成年度] 2015 年度

[背景・ねらい]

バレイショ栽培において重要土壌病害であるジャガイモそうか病は、病原菌に汚染された土壌および病塊茎によって伝染するため、発生圃場ではクロルピクリン剤等による土壌消毒が実施されている。種いも伝染の防止対策は、薬剤への浸漬処理が実施されているが、土壌消毒を実施した圃場に植え付ける場合は効果が高く、かつ安定した薬剤を選択する必要がある。このことから、各種薬剤の種いも浸漬処理における伝染防止効果を明らかにする。

[成果の内容・特徴]

1. バクテサイド水和剤は、本病の種いも伝染に対し、安定して高い防除価（80 以上）を示したことから最も効果が高く、次いでアグリマイシン-100、銅ストマイ水和剤、フロンサイド水和剤の効果が高い（表 1, 図 1）。

[成果の活用面・留意点]

1. 本成果情報は、ジャガイモそうか病防除を目的とした種いも消毒剤を選択する際に利用できる。
2. そうか病の病斑が形成された塊茎は、薬剤浸漬処理の効果が不十分な場合があるので、できる限り種いもとして使用しないことが望ましい。
3. 銅およびストレプトマイシンを含む薬剤により種いも浸漬処理を実施する場合は、種いも切断後や萌芽後に処理したり処理後に長時間ぬれたままにすると、発芽遅延等の薬害が生じるおそれがある。

[具体的データ]

表1 ジャガイモそうか病に対する種いも消毒剤の発病抑制効果

商品名	一般名	使用濃度 (倍)	発病度				
			2013		2014		2015
			春作	秋作	春作	秋作	春作
バクテイト水和剤	オキシテトラサイクリン・ストレプトマイシン・銅水和剤	50	14.5	0.3	1.1	6.9	5.7
アガリマイシン-100	オキシテトラサイクリン・ストレプトマイシン水和剤	40	18.2	0.2	9.4	5.4	14.8
銅ストマイ水和剤	銅・ストレプトマイシン水和剤	100	9.3	0.3	17.5	6.3	15.1
フロンサイト水和剤	フルアジナム水和剤 (50.0%)	100	11.5	0.1	16.8	10.5	9.6
A剤	ノルフェノールスルホン酸銅乳剤	50	36.5	1.1	—	—	16.9
B剤	ストレプトマイシン水和剤	60	76.7	0.0	18.3	9.9	21.6
C剤	ストレプトマイシン・チオファネートメタル水和剤	40	36.4	0.3	26.2	11.3	19.1
D剤	フルアジナム水和剤 (39.5%)	100	22.2	0.6	13.9	14.0	17.0
無処理			76.0	2.1	60.0	34.5	35.6

注1) 表中の数値は4反復の平均値を示す

2) A剤は、2014年春作及び秋作のデータなし

3) 塊茎表面にそうか病の病斑が1~3個ある塊茎を、所定濃度に調製した薬液に10秒間浸漬し、クロロピクリンにより土壌消毒した圃場に植付けた

4) 収穫後に2S(20g)以上の全塊茎について、程度別に発病の有無を調査し発病度を算出した

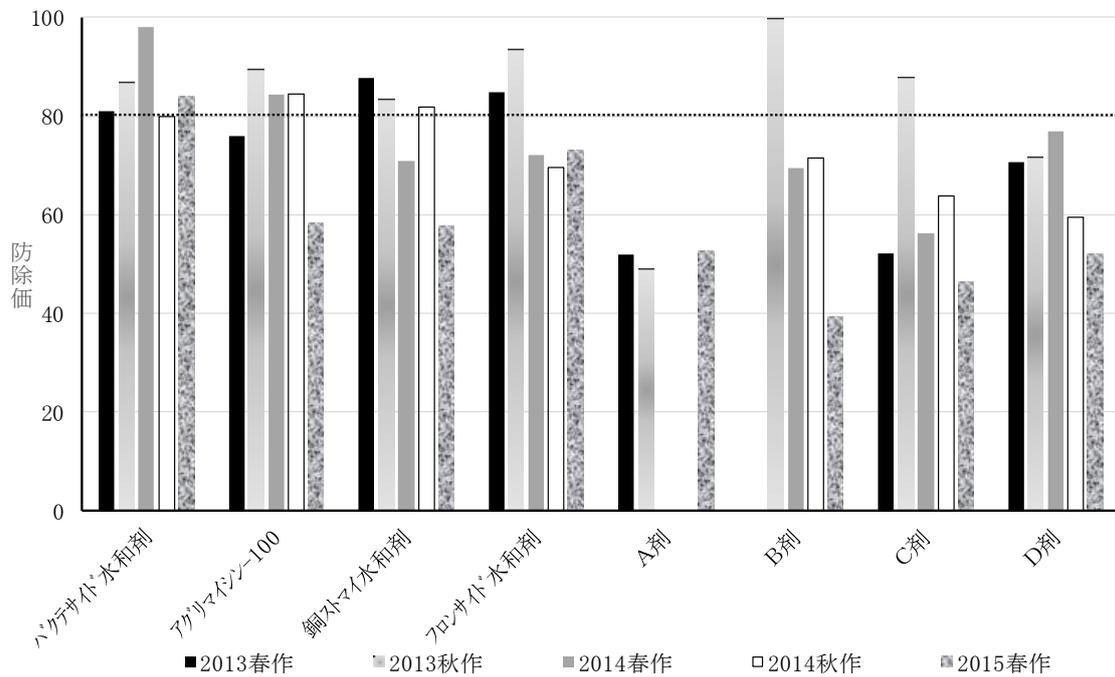


図1 ジャガイモそうか病に対する各種薬剤の種いも浸漬処理による伝染防止効果

注1) 図中の防除価は表1の発病度より算出した

2) A剤は、2014年春作及び秋作のデータなし

[その他]

研究課題名：ジャガイモ病害虫に対する新農薬の作用機作

予算区分：県単

研究期間：昭和47年度～

研究担当者：永尾 亜珠沙、渡邊 亘（現：五島振興局農林部）、小川 哲治（現：県北振興局農林部）、菅 康弘（現：病害虫防除所）